

男の歴史とは過ちの歴史

意図的なものであれ、そうでないものであれ

1960 年代に造られた長いエドサ通りを歩いた足で

2020 年には体中に水ぶくれの出来た影たちに支配された人間としてまた歩むのだ

戦争について多くを語らず、彗星についても多くを語らないでおこう

たとえその人類を破滅させると何度も語られた黙示録を耳にしても

街で暗躍していた連続殺人事件の犯人についても多くを語らないのだ

当時は電柱にまだ監視カメラがなく、夜の闇が常に周囲を暗くしていた

また、木々が伐採されつくした森で行われたギャンブルと幸運についてや

年老いた司祭の頭を中心部に棲みついている病気がちで変装した狼が拾った骸骨について

帰宅中の労働組合委員長が自分の家族の詩を書き出し焚火で燃やして灰にしたことや

はたまた海に投げられたまま地球の真ん中に近い岩で歌い続ける防水ラジオについて

いずれも多くを語らないようにしよう

永遠にそして常に、男とは石ころやセメントに敬意を示さずに生える雑草であり

まるで自身を腐敗させる宇宙のようであり

最終的に災難の根源を選ぶ神について勝手に作られた伝説のように

生き物にとって飢餓のように、忘れ去られる言葉のように

その命じられた物は何でも、男たちが存在する時でなく

男たちがどこかで、その場所やこの場所のどこかで希望する時に立ち現れる

われわれの英雄たちについても多くを語らないでおこう

その教師たちや、そのスーパーヒーローたちについて

彼らは全員、本物になりたがっているものの

とりあえず椅子が柔らかく、ベッドが良い香りで包まれていればよく

事前に合意していない秘密ごとを打ち破るのが好きで

教育者や博士、人道主義者であるという名目でライバルが立ち寄った建物を爆破する

その崩れ落ちる天井の下敷きになる子どもたちの話を終わらせることにも多くを語らない

一方で父親になったばかりの男が自分の最後の子どもの出生を病院で祝いながら

いつの日か再び自分の妻や母親を裏切り

まるで運命の瀬戸際にいるかのように人を裏切ることに溺れる

家族の全員や一族、祖先たちをみな一人一人見つけ出し

すべての子どもたちはいつまでも独身を通し

埃から造られたものの放置されて孤児となった傷ゆえに

知り合う全ての人を傷つける
たとえ過去の数十年間を遡って歩んで行ったとしても
そしてその途中で死んだ神話や巡礼者たちすべてに出会ったとしても
ある者の足は他者をいつも一歩追い抜き、そのとたんに別の他者から一歩遅れる
この呪いはただ知っている——過ちの歴史とは
男の歴史であることを。意図的であれ、そうでないものであれ

outlive poems 所収

Copyright © 2024 Paolo Miguel G. Tiausas

Translation copyright © 澤田公伸